

[阿部]

おはようございます。小樽の裁判所、書記官阿部です。

[野村]

野村と申します。お世話になります。おはようございます。阿部さんですよ？

[阿部]

そうです。

[野村]

「今日までに、次回期日に陳述する書類を出して欲しい」という風に言われてたんですけど、書類というか、特定する作業を、「今日までに出して欲しい」と言われてたんですけど、やっぱり間に合わない。どうしたらいいかと思いついて・・・

[阿部]

どれくらいで、できそうですか？

[野村]

最初から変更してる通り、1ヶ月先じゃないと無理・・・相当なボリュームになります。5センチ以上の厚さになる。

[阿部]

ですから、どれくらいになりそうですか？

[野村]

いや、だから1ヶ月かかる。

[野村]

あと1ヶ月ということですか？

[野村]

最初に「1ヶ月延ばしてくれ」と言ってる通り、1ヶ月では無理で、2ヶ月かかる。

[阿部]

今日から、さらに、あと1ヶ月必要ということですかね？

[野村]

今日から、さらに、1ヶ月必要です。

[阿部]

そうですか。分かりました。その旨は、裁判官に伝えておきますので。あとは、裁判官が次回期日でどうするかというのは、裁判官の訴訟の判断になるので・・・

[野村]

それを、ちょっと阿部さん、この前、僕もここで阿部さんに聞いて、難しいってことも、何となく分かるんですけど・・・でもね、訴訟サービスを受ける立場からすると、その現実の舞台まで行かなければ、何も分からないっていうのは、ちょっとあまりにも不親切じゃないですか？

僕が言ってるのは、阿部さんに言っても、何も回答返ってこない。全て「裁判体が決める」「裁判体が決める」と。

でもね、前回までに僕が聞いているのは、それなりの理由を添えて、文書で、それなりにボリュームがあるからということをご説明申し上げて、そのときに阿部さんから聞いているのは、裁判体の判断だという前提で、何も阿部さんからは出てこない。でもね、期限に間に合わなかったら、こちらとしては、それをもって、もう出さないとみなされて、不利益を、不利な処分をされてしまうという、恐怖感を持ったってしようがないわけですよ。それに対して、だって阿部さんは何も答えられないでしょ？

[阿部]

今のこの段階で言えば、裁判官にまだそういう報告してないので、どうするか分からないので、もし裁判官がそういうことで「じゃあ、次回期日では間に合わないから、じゃあ、次回までに出すように伝えてください」という風に言われれば、私としても伝えますし、「それは、次回期日で裁判官が直接法廷で野村さん

にお話しますよ」っていうことであれば、それはそれで、別に私は「分かりました」ということになるので・・・

[野村]

阿部さんが言ってることは分かります。

でも、これ初めて言ってる話じゃなくて。文書で出す際に、口頭でも、さんざん説明して、こういう理由で時間がか掛かるんだということは、申し上げてるはずなんです。初めて言ってることじゃないですよ。あなたが言ってる言葉だと、次回行きました、「(原告が)まだ間に合いません」「(裁判官)じゃあね、これで締め切ります」と言われたって、僕は文句は言えないわけですよ。

[阿部]

だから、締め切るかどうか分からないので・・・

[野村]

言われても、しょうがないわけですよ。全て「裁判体が」「裁判体が決める」と。あらかじめ、事前に、どんな打診をしても、全て突っぱねて・・・全てね、具体的な回答はなくて、「裁判体が決める」「裁判体が決める」と。その期日でなければ何も分からない、という状態は、司法サービスを受ける側にとっては、相当な不利があるんじゃないですか？

[阿部]

だから、裁判官が、「野々村さんに、こうこうしてください」っていうことで、指示があれば、私もお伝えしますよって、先ほど申し上げました。

[野村]

期日じゃなくても、あらかじめ事前にお伝えいただけるということで間違いないですか？

[阿部]

いや、そこは分からないですって、これも先ほど申し上げました。

[野村]

それは分からなかったら、この電話で、結局、僕は、あなた方に何を言っても、何ひとつ裁判所から帰ってこなくね、次回期日に行って、出せないってことになって、さっきも言ってる通り、「これにて、全ての供述が終わったものとみなします。次回、判決」と言われても、僕はしょうがないわけですよ。

[阿部]

ええ。

[野村]

しょうがないわけですよ。阿部さんが言ってることを、まともに捉えれば。それは、司法サービスとしては、あまりにも、他に術がなくて、紳士的な話し合いが全て閉ざされて、仕方なく裁判所に訴えて、解決を図ろうと、すがる者に対しては、あまりにも、冷たいやり方じゃないんでしょうか？

[阿部]

だから、それは私の一存で申し上げられることじゃないんですって、それも申し上げますよね？

[野村]

分かっています。

もう1回聞きますよ。結局、いつもそうだよ。裁判所は。あなたに言ってもしょうがないのは、分かりますけどね。

[阿部]

私の方から、裁判官に対して、「次回で弁論終結するのは止めてください」っていう風に言って欲しいってことですか？

[野村]

違う。僕が言ってるのは、1ヶ月も前から、「時間がかかるから、そこを理解してくれ」ってことを言ってるにも関わらず、何ら回答がないことに対して、フラストレーションを覚えてるわけですよ。

[阿部]

回答？回答ってなんですか？

[野村]

回答というのは・・・

[阿部]

「次回期日を延ばしてください」というお話に対しては、裁判官が「次回期日を延ばすことは、しませんよ」という話を、お電話いただいたときにお伝えしましたよね？

[野村]

聞いてますよ。

[阿部]

ええ。

[野村]

僕が聞いているのは、次回期日を伸ばす前提としては、「次回期日までに出して欲しい」と言われている文書が間に合わないから「延ばしてくれ」と言ってるんですよ。

[阿部]

はい。

[野村]

そういう話は説明してますよね？

[阿部]

ええ。

[野村]

延ばせないのは、分かりました。でも、やはり文書が間に合わないと。当初、推測した通り。やっぱり間に合わないと。頑張ってるけどね。どう考えても、出すものを全て、ちゃんと文章の間違いなく、チェックした上で、出す状態には到底ならない。せめて骨組みだけでも出そうかと思ってるけど、それも危うい。

少なくとも今日は間に合わない。明日明後日になれば、もしかしたら、できるかもしれないけど、ちょっと自信がない。

言っているのは、いま、この場で、この電話で聞いているのは、文書が遅れた場合に、どういう不利益があるのかを、あらかじめね。それでも、部分的にでも出した方がいいのか、全部次回まででいいのか。それを聞いているんです。

[阿部]

だから、それであれば、そういうご質問なのであれば、その旨、裁判官に確認をして、折り返し返事させていただきますよ。

[野村]

そうしてください。お手間かけますけど。

[阿部]

分かりました。裁判官、まだ来てないので、来てから、報告をして、それで裁判官が「こういう回答してください」ということで、返事が出てからになるので、今すぐ、10分後20分後という話には多分ならない。

[野村]

もちろん、全然、はい、大丈夫です。いただければ、大丈夫です。

[阿部]

ええ、分かりましたので、連絡します。

[野村]

お手間かけます。失礼いたします。

[阿部]

はい。

以上